

ナンシー 関 (なんしー せき)

1、プロフィール

有名人の似顔絵を彫る「消しゴム版画」という新しいジャンルを確立。さらに、鋭い観察眼でテレビ界などの批評エッセーを数多く手掛け、著作数は 30 冊をこえる。

<生没>

1962(昭和 37)年7月7日～2002(平成 14)年6月 12 日

<代表作>

『ナンシー関の顔面手帖』『何様のつもり』『小耳にはさもう』『地獄で仏』『テレビ消灯時間』1～6など

<青森との関わり>

青森市堤町の関ガラス店に生まれ、聖マリア幼稚園、堤小学校、浦町中学校、私立明星高校を卒業。

2、作家解説

本名・関直美(せきなおみ)。関英一・節夫妻の長女として誕生。幼い頃から本好きで高校時代には日本文学全集などを読破、また手先が並みはずれて器用であった。日大新聞科をめざすが受験に失敗、1982 年法政大学二部文学部入学後、「広告批評」主宰の「広告学校」受講。遊びで作った消しゴム版画が業界人の目にとまり、1984 年春「ホット・ドック・プレス」(講談社)で消しゴム版画家としてデビュー。たちまち売れっ子となり、大学は3年で中退。本名の直美から「ナンシー」という名を付けたのは、当時編集者であった作家いとうせいこう氏である。「消しゴム版画＋コラム」という独特のスタイルはごく初期に定着。「週間朝日」「週間文春」「広告批評」「噂の真相」「クレア」などに連載。どこかノスタルジックな版画と辛辣で的確な批評は、常に読者をうならせた。2002 年虚血性心不全により 39 歳の若さで急逝、日経新聞など全国紙がこぞって社会面でその死を報じている。共著を

持つ大月隆寛氏（民俗学者）は、「彼女はテレビを、そのバカで通俗なありようのまま、世間の多くが抱える日常の感覚の内側から眺めて語る、という離れ業をやったのけてきました。テレビを高みから見下ろすのではなく、バカで通俗なそのテレビと同じ空気を吸い、同じ場に生きている自分も共にひっくるめて眺める——そこに旧来の知性や教養を超えた『批評』が宿りました」と、毎日新聞に追悼文を寄せた。また追悼特集を組んだ「広告批評」2002年8月号でいとうせいこう氏は、「コラムニストには、考えを話す人と、話を考える人の二種類がある。ナンシーは明らかに前者の少数者だった。どのような具体例にも必ず高度な抽象化をほどこし、考えに考え抜いて事態の本質をえぐり出す。それは凡人に出来る行為ではない。彼女は唯一無二の凄い人だった」と、その死を惜しんだ。

没後、「日本文化デザイン賞」特別賞が贈られている。